2019 年度　白梅学園大学大学院博士課程　学位審査報告書

学籍番号　B7H001

氏名：　古賀　松香

学位の種類：　博士（子ども学）

学位論文題目：　保育実践に見られる保育者の身体的・状況的専門性

論文審査委員：　（主査）髙田　文子
（副査）無藤　隆（指導教員）
（副査）本山　方子
（副査）大豆生田　啓友

１．論文内容の要旨

本論文は、保育実践において欠くことのできない身体と状況に着目し、複数の文脈が絡み合う保育実践のダイナミック・プロセスの中で発揮されている保育者の専門性を、身体的・状況的専門性として検討を行い、その特徴を明らかにすることを目的とする。この身体と状況を視点とした保育者固有の専門性は先行研究において指摘されているものの、実証的理論的な検討がほとんどなされておらず、さらに検討を行う必要がある。本論文の身体的・状況的専門性の検討におけるキー概念は、保育不全感の感知、教育的瞬間の感知、優先性の即応的判断の 3 つである。保育不全感の感知とは、保育実践のさなか、もしくは省察時に、自らの保育実践が不十分であると感じることと定義する。その保育不全感は、課題が感知されたある行為や場面やかかわりをよく見ようとすることにつながっていくと推測される。van Manen（1991）は、子どもに対する何らかの教育的な働きかけが大人に期待される状況に対して、能動的に出会うことを教育的瞬間としたが、本論文では、なぜその状況が立ち現れた瞬間を感知できるのか、ということを検討する。そういった教育的瞬間が集団保育においては同時多発的に生じる。その同時多発的に生じた教育的瞬間の感知に対して、瞬時に優先性を判断し、対応していくことを、ここでは優先性の即応的判断と呼び、そこにある保育者固有の法則について検討を行う。本論文で言う身体とは、保育行為を実現していく具体としての身体であり、「身体的」とは、身体で感知している言語以前のものも含めて、その専門的判断に生かしていくという性質を持つ身体の側面を表す。また、状況とは行為者が自身の行為の意味を伝達したり、他者の行為を解釈したりするために利用できるリソースの総体であり、言語的、非言語的、そして推論に基づく一連のリソースを含んでいる。「状況的」とは、個別具体的な、時空が特定された実践行為と結び付いて成立する概念であり、その個別具体的な事象や事柄を、ある専門的判断に生かしていくという性質をもつ状況の側面を表す。本論文では、この密接な関係にある身体と状況のもつ性質を実践における専門的判断に生かしていく専門性について、保育者の「身体的・状況的専門性」として定義し、検討する。

第 1 章にて保育者の専門性についての議論を概観し、身体と状況という視座を導入する意義について述べる。第 2 章以降では、保育実践に見られる保育者の身体的・状況的専門性の構成概念である保育不全感の感知、教育的瞬間の感知、優先性の即応的判断について、保育者が感知する保育実践の難しさに着目して検討を行う。そして第 9 章で、3 つの構成概念の特徴をまとめた上で、保育者が保育の難しさを乗り越えようとするときに、その身体的・状況的専門性がどのように発揮されているか、論じる。各研究においては、保育者が「実践において難しさを感じる」ということが、その専門性が立ち現れる契機として捉え、着目する。研究 1, 2, 4, 6 では、「1 歳児保育の難しさ」を、研究 5, 7 では「指導が難しいと感じる幼児」をテーマとして、保育者へのインタビューと観察を主な手法として質的な分析により調査を行った。研究 3 では、実践における難しさを超えるためのカリキュラム再編成プロセスの意味を検討した。以上のことから、本研究では、保育実践の中で自らの実践が不十分であると感じる保育不全感が、実践のとらえ直しやより繊細な感知を目指すことにつながり、次の実践における構えを形成すること、その構えがあることで実践時の教育的瞬間をとらえ、能動的に関わることが可能になること、さらには、課題が多発する状況において複数の教育的瞬間の感知がなされた場合に、保育者は、援助の同時進行性と時機選択を組み合わせた優先性の即応的判断を行い、現在の状況を相互行為的に形成していることが明らかになった。保育実践に見られる保育者の専門性とは、身体的・状況的感知に何度も細やかに立ち戻り、また実践へと展開していくサイクルを能動的に生きることが核となっているのである。

２．論文審査の結果の要旨

第 1 回目の審査会は、2019 年 11 月 5 日 18 時半から開かれた。そこでは、日本の保育学の倉橋・津守の流れをよく受け継ぎ、身体的・状況的という理論が整理されたと高く評価された。精緻な実践の分析により、保育を実践を核とした日常的な営みであり、連続性と循環性がありながら、一回性の瞬間の連なりという独特の現在として捉え、その保育者の関わりのあり方を不全感、教育的瞬間、優先性の即応的判断という 3 つの契機により検討を可能にした。実践場面を取り上げ、その詳細でミクロな分析も優れたものである。全体として論文の構成もしっかりとしている。ただ、序章・第 1 章の整理が列挙的であり、到達点と課題を明確にしてほしい。また、理論的に用語等の検討がさらに必要である。特 l に「実践知」等の用語がそれで良いのかどうか、総括的討論をベースに 1 章から 8 章を見直すこと。以上の修正を行うことで、第 2 回目の審査会に進むことが了承された。

第 2 回目の審査会は、2019 年 12 月 23 日 18 時から開かれた。全体としてよく修正され、流れが良く分かるようになった。「専門性」について各種の専門性の用法を参照しつつ、保育における専門性を相対化して捉えるとよいだろう。その他、例えば、「応答」「対話」等の用語も注意深く用いてほしい。特に行為としての実践のリアルなこととしてなのか、一種のメタファーなのかの使い分けが必要である。「省察」といった概念もデューイの意味しているところを正確に述べること。最も重要なことはここで言う「身体的状況的専門性」という概念を命題として明示し、状況や身体ということで何を意味しようとしているかを述べることである。とりわけ、概念として構成されたものなのか、観察可能なのか、実態とメタファーの区別を念頭において、再度論文の議論を捉え直してほしい。そういった修正を行うこととして、公開審査会に進むことが了承された。

第 3 回目の審査会は、2019 年 2 月 10 日 18 時から開かれた。第 2 回目の修正の要求を適

切に修正し、発表を行った。質疑として、論文の概念について曖昧と思われる点や今後の課題について質問がなされ、適切に答えられた。審査委員から、論文がよく練られて構成もきっちりとしており、保育の世界を明確な言葉と論理により検討できていること、さらにその内容は保育学の着実な前進を示すものとして高く評価された。特に「身体的・状況的」「質感の差異」等の概念により実践的な視座を研究に載せることに成功した。長期にわたる一連の研究を関連付けてまとまりのあるものとしている。特に保育の展開のプロセスとしての 3 つの契機、すなわち不全感、教育的瞬間、優先性の即応的判断は実践的にも説得力がある。保育者の専門性を通して保育実践とは何かを問うているのであり、実践内部におけるいわば自律的な改善過程を検討できていると言えよう。本研究は日本の保育学の 1 つの成果と言えるものであり、理論的な明確さと方法論的な精密さにより、今後の保育学の新たな領域を切り開いたと見なせよう。最終試験では学力の確認を含め、それまでの修正が適切になされ、公開審査での質問に的確に答えたことが認められ、博士論文として合格と判定した。